

連載

# 熱海市立図書館 100年のあゆみ

## 第9回 市民に親しまれる 移動図書館

問い合わせ：熱海市立図書館

☎0557(86)6591

昭和28年から、図書館に来ることができない市民を対象にした「お茶の間図書館」が始まりました。これは、5〜10世帯単位でグループを作り、毎月1回、希望の本を図書館に連絡してもらい、代表者の家に図書館から本（20冊以内）をまとめて配達する仕組みでした。

この活動は、静岡県立葵文庫（現在の静岡県立中央図書館）の取り組みを参考にしましたが、読者層の拡大や、各家庭に読書の習慣が広まったという功績はとて大きなものでした。当初は15グループで始まった「お茶の間図書館」は、市民の間にながら広がりが、次第に貸し出し数も増え、図書館では嬉しい悲鳴が上がったそうです。

図書館に保存されている「お茶の間図書館機関紙綴」には、「図書館の方がオートバイで届けてくださるが、そのご苦労には、一同いたく感

謝している」との言葉が紹介されています。大勢の市民の皆さんに感謝されたオートバイによる配達の前張りが認められ、昭和44年には最初のブックバスが導入されると、活動の範囲も大きく広がりました。

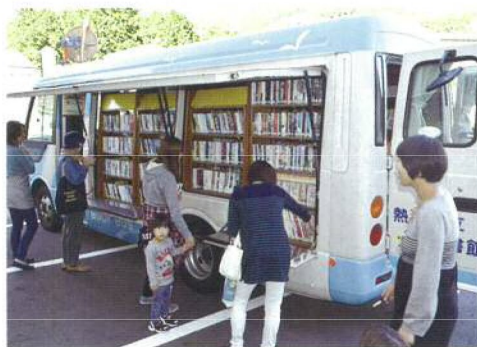
本を詰め込んだ箱を車の中に積み、熱海の町を南北に走り回るブックバスは、すぐに市民のおなじみとなりました。特に、隔週日曜日に開催されていた伊豆山と網代での「子ども一日図書館」では、自分たちの町内にやってきたブックバスから本を借りようとする大勢の子どもたちの姿が見られました。

また、昭和47年から相の原と和田山で開催されるようになった「ひととき図書館」では、本を選ぶかわら、気持ちの良い青空の下で、図書館職員の演ずる紙芝居に集中する市民の姿がありました。



「ひととき図書館」での紙芝居の様子

昭和50年になると、書棚を積み込んだ大型のブックバスが登場しました。子ども向けの本だけでなく、一般の書籍も満載した移動図書館がやって来ると、書棚を見ながら読みたい本を探す人の姿が急増するなど、市民の読書熱も高まりを見せました。その結果、14カ所のステーションが誕生することとなりました。



現在のブックバス「かもめ号」

昭和56年、平成4年、平成17年と買い換えられた熱海市のブックバス「かもめ号」は現在、初島を除く熱海市内の全ての小中学校を含む21カ所のステーションを巡回しています。図書の貸し出しを行うほか、予約を受け付けたり、購入の希望を聞いたたり、図書の相談を受けたりと、多彩な活動が行われているかもめ号は、市民の皆さんの友だちとして親しまれています。

### 市長メッセージ 96

(仮称) 熱海フォーラム

熱海市長 齊藤 栄



昨年4月、熱海市役所に隣接する約1000坪の土地を取得することができました。建物が密集する市街地の中心部にこれだけの広さの土地を得られたことは、千載一遇のチャンスだったと思います。私はこの土地を、世代を越えた「市民の集う場」にしたいと考え、そのための具体的な機能として2つを挙げました。

1つ目は「ホール」です。新たなホールの建設は、平成23年3月に耐震性の問題により観光会館が閉鎖されたからの課題です。私は、市民の皆さんがさまざまな活動をするにあたって使い勝手が良く、満足度の高いホールが市内に必要であると考えています。その結果として、利用頻度の高いホールとなることを望んでいます。

もう1つは「図書館」です。先月、熱海市立図書館が創立100周年を迎えました。坪内逍遙先生の図書の寄贈からスタートした歴史ある図書館です。熱海の大切な知の財産をしっかりと未来へ継承するとともに、熱海発展の歴史などを分かりやすく展示していきたいと考えます。

この2つの機能を中心とした複合施設を、仮に「熱海フォーラム」と呼び、市民ワークショップなどを開いてさまざまな観点から意見を聞いています。敷地面積や事業費などの制約がありますが、利用者の満足度を高めるため、どのようなホールや図書館を作るべきか、将来に過度な財政負担を強くないため、どのような手法で建設や運営をすべきかについて、さらに議論を深めていきます。